

## 巻 頭 言

帝塚山大学心理学部紀要第6号の刊行にあたりお慶び申し上げます。教育研究の成果は文字化されて初めて学術的「文化」としての形になります。毎年確実に刊行され、しかも心理学領域の包括的分野を濃縮した質の高い論文集に仕上がっていることは本学の発展が肌で感じられ、まことに嬉しい限りです。本学部は学部から大学院後期課程まで有機的に整備されていることが若い力を結集し、学問の質をさらに押し上げています。

昨年、横浜で国際心理学会が開催されました。プログラムには**Scientific Program**とありました。心理学は歴史があり従来の確立したスタイルを持つ一方で、科学的研究スタイルをも取り入れる方向にあり、その舵取りはそのような視点が欠けていたという裏返しの解釈の表れでもあります。例えば、「DNAに魂はあるか、講談社」の著書F.クリック(ノーベル賞受賞者)は心理学の現象解析や先見性を尊敬する一方で、科学的根拠に欠ける点を厳しく説いております。もはや心理を語るには証明力と原理追求の姿勢が求められています。この手法は心の普遍性を獲得する道であり、心の根本原理を解き明かすものでもあります。心理学は人種や文化を超えた人類共通の幸せに貢献することを目指したいものです。幸いにも本学の心理学研究は心理科学的コンセプトを確立している世界に誇れる研究機関に成長しており、この紀要にも色濃く反映されています。若い研究者には、実践や応用を急ぐあまり、原理的研究をおろそかにしないことを期待します。

研究成果に大切な視点は他人に引用、使用されることを念頭に置いた研究プロトコールを考えてほしいものです。本学部紀要の前身である心理福祉学部紀要第5号(平成21年3月号)に「心の生化学的診断とその心理学への応用」と題した私の論文があります。この論文を見つけたある臨床検査研究機関から分析依頼が来たことがあります。私の開発したこの方法はオリジナリティーが高く、真似ができない分析技術を発表していたからです。このようにWeb上に掲載されている以上、「紀要」が社会に与える影響は計り知れないことを実感いたしました。

心理学の今後の課題は個人差、個体差を前提とした研究方法の確立です。この解析には単なる分散分析や $t$ 検定のような統計的処理では多様性のある人の心の解明は不可能です。この研究にはパターン解析のような手法が必要となり、本学部紀要にもそのような視点を当てた研究が多く掲載されることを期待します。

帝塚山大学心理学部  
教授 山本 隆宣